

〔研究ノート〕

現代中国における「九〇後」¹子どもを持つ父親の 学校外の教育投資 —父親の職業階層と投資リターンを中心に—

劉 楠

要 旨

中国における父親の子どもに対する教育投資の定義と影響要因を明らかにする。中国山西省公立高校卒業生「九〇後」の父親7名を対象にインタビュー調査を行った。その結果、学校選択、塾、付き添い勉強、習い事の4点から教育投資の概念を抽出し生成することができた。次に教育投資について(1)父親の収入と学歴などが直接子どもの進路に関連するというよりも、父親の趣味や子どもとのコミュニケーションを通して子どもが自身の進路を決められるよう、父親は導き出す役割を果たすこと、(2)父親自身の経験から「知識は運命を変える」という考え方がある一方、子ども世代の社会状況が変わり、能力や学歴よりも、潤沢な資産・人に畏敬の念を抱かせる力を持っていた方が良いと考える父親もおり、父親の価値観が多様化していること、(3)父親は、男子と女子に就いてもらいたいと期待する職業が異なることが示唆された。父親の趣味習慣、生活リズム、職業観などは子どもに伝わり、子どもの職業観の確立およびその後の職業選択に関連すると推察された。

1. 問題背景と目的

本研究の目的は、成人子の大学進学先のランクと、父親の職業階層が学校外教育投資、さらに投資リターンとどのような関連性を持つかを明らかにすることである。

まずは中国の学校外投資に着目する背景を二つ取り上げる。中国において、成績の向上を追求する「応試教育」²が過剰に進んだことに対して政府は、2001年「素質教育」³を試行しはじめた(項 2010)。しかし、優秀な成績(従来の応試教育の目標)を求める保護者にもある程度応えなくてはならず、「素質教育」を広めることは困難(樋田・邵・十河 2007 p.116)な一方、子どもの成績を確保するために保護者は学校外

教育にサポートを要請しはじめた。最新記事「中国はかつての日本のようにゆとり教育へ」⁴によると、習い事と学習塾・予備校を合わせて、2016年中国市場規模は8,000億元(約13兆円)を超えている。こういった事実から親の学校外教育投資に対するニーズの高まりがわかる。

もう一つの背景は、改革開放で導入された市場経済がもたらした人々の消費意識への影響である。教育費に対して人々の意識が消費者としての感覚で捉えられ、競争心理は人々の学歴への過剰な期待を誘発するため、学校外教育投資の現象は盲目性と過熱性を帯びている(篠原 2007)。階層格差と世代間伝達の代表例は「父親バトル」(中国語では「拼爹」)である。父親バトル(「拼爹」)は、広義では大学進学先、就

職、住宅購入等において、子ども自身の努力や能力(「拼能力」)によるものではなく、父親の社会的地位、財力や人脈の力を借りて問題解決に持ち込む現象を指す。父親バトルによって「官二代」⁵(官僚二世)と「富二代」(商人二世)が父親の保護により競争で優位に立つ一方、「農民工二代」(都市部に出稼ぎに来ている農民の二世)は自分の努力によって階層の上昇を果たすという格差がある。本稿では狭義で、子どもが高校卒業後どのランクの大学に進学できるかは、父親の財力や人脈、学校外教育投資によって左右されることを明らかにする。

父親に焦点を当てる理由は、父親が家族において経済的支柱になっていることと(森田 2011)、小中学生においては母親の影響が大きい、高校生以降は、父親の威厳が重んじられており、父親の影響力が上昇する(孫 2009)からである。

2. 先行研究の検討

(1) 学校外教育投資

篠原(2007)は、家庭教育支出を基本教育支出、展開教育支出、選択性教育支出の3つに分類した。基本教育支出とは学費等の支出、展開教育支出とは学校外教育の塾と習い事への支出、学校外の書籍費用などを指す。選択性教育支出(選校費)とは、学校選定時において、希望する公立エリート校の入学試験の合格点数に達しなかった受験生を対象に、特別枠で点数を加算させ入学を認めるが、代価として寄付金の納付を求められるものである。小・中学校において「重点校」の学校選定制度はそれぞれの学校で作られ、金額にはばらつきがあり、特に高校段階の選校費の金額は顕著に高く、高いところは一万元を超える(篠原 2007)。

学校選択現象が生じる背景として1970年代末、教育資源の不足とエリート人材の養成を急ぐため、国は一部の学校を重点校に定めたため(劉・付 2007)、学校資源の不均等による生徒の学力格差が顕在化した。「中華人民共和國教

育法」では区域ごとに最寄りの学校に入学することが明文化されているが、選定された重点校に毎年進学希望者が殺到する現状がある(劉・付 2007)。

(2) 父親と子どもの学校外教育投資

これまで親の社会階層と教育投資に関する研究は、母親を中心とする研究が中心になされてきた。中国の小学生を持つ母親の教育投資の研究結果によると、自営業(個人経営者、私営企業主)の母親は時間的制約があるため学習塾をよく利用する機会が多いものの、習い事への関心が薄い。他方で、教職員の母親は学習塾より自宅指導を行っており、習い事にも熱心である傾向が指摘された(馬 2017)。高校生以後の子どもに対して父親の影響力が大きいにも関わらず、教育投資を対象とした研究の蓄積がまだ少なく、中国では父親の学校外教育投資に関する研究が求められている。

父親と子どもの学校外教育投資をめぐる先行研究については、日本では、平尾(2006)が、親の資源(時間的、感情的、身体的ゆとり)がある場合において、父親の学歴が、子どもの大学進学率に与える影響が息子より娘の方に色濃くあらわれることを示した。

中国においても、親の収入と教育投資の研究報告がある(郭・閔 2007)。親の収入が子どもの教育に与える影響について、計量研究から、父親の収入が高いほど、子どもの教育に投資する傾向にあり、子どもがより高い学歴を持っていれば、新興業界において高収入を得られる可能性が高く、教育投資額は大学進学さらに就職後子どもが得られる収入と正比例の関係にあり、父親の収入と子どもの収入の世代間伝達が見られた(郭・閔 2007)。ただし、教育投資内容は子どもの大学進学との関連について具体的に言及しなかった。

また、文化大革命で大学受験の機会がなかった父親は希望を子どもに託し、特に社会階層の高い親ほど子どもへの期待が高いことが報告された(杜 2012; 辺 2009)。

(3) 学校外教育投資と親の投資価値(リターン)

Blake (1989) は、子どもたちと交流する時間、感情、身体的エネルギー、モニタリングなどを「親の持っている資源」として定義し、さらに、親の資源が人数分で分配されるため、子どもの人数が多ければ、教育達成度が低くなるという「資源希釈説」を提唱した。子どもの学歴達成にむけて、きょうだいの数が増えると学歴が低下し(橘木・八木 2009)、男性よりも女性に強くその傾向がみられる(平尾 2006)。

親の投資価値(リターン)が高いと考えられている子どもは稼ぐ能力の高い男の子(Becker 1991)と報告されている。ここでは、親の投資価値(以下は投資リターンと統一)は、教育投資した後、子どもが取得した教育歴等を指す。教育期待とは教育歴等において理想的達成度を意味する。子どもの教育歴は親の期待に沿わない場合に、リターンが低いと感じるが、期待通りまたは期待以上に達成できた場合、リターンが高いと感じられる。

日本ではアンケート調査による実証研究の結果(小野 2015)、子どもに大学進学を期待する親は全体の73.1%であった。これは、当該年度の大学進学率の男女合計50.8%をはるかに上回っている。上記の結果から、日本の親は子どもの大学進学の期待が高いものの、現状においては期待通りにうまく行かない場合が多いのではなかろうか。しかし、大学に進学したものの、希望の大学に入れるとは限らないだろう。親は我が子への進学期待とリターンを如何に感じ取るか、またその過程で生じる葛藤と対処等が明らかにされていない。本研究では、上記の先行研究を補う意味で、以下の2つのリサーチクエストに基づきヒアリングデータを分析する。

- (1) 中国において、父親の子どもに対する学校外教育投資がどのようなものか。
- (2) 父親の教育投資は、投資リターンとどのように相互作用するか。
- (3) 子どもの職業期待は、父親の職業と子どもの性別によってどのように異なるか。

3. 方法

今回のインタビュー調査は、2014年5月～2015年3月中国山西省B県(県とは市の下位区分)とA市で実施した。対象者と事前に電話でコンタクトを取り、引き受けてくださる方に、自宅訪問や近所のお店で1～2時間かけて半構造化インタビューを実施した。今回の調査はお茶の水女子大学の倫理委員会から認可を得ており、対象者の承諾を得た上で録音し、その後テープ起こししたものを分析資料とした。内容は、父親の普段の子どもとの関わり方、塾・習い事等への教育投資、子どもへの経済、情緒、生活面でのサポートである。

サンプリングの特性について述べる。前述した研究課題から父親の投資リターンと父親の職業を基準に設定し、サンプリングを抽出した。まず、高校卒業後のリターンについては、子どもの進学先の大学ランクを基準とする。子どもの進学先について、3年制大学の「専科」⁶は2名、4年制大学の「本科」においては「一級本科」2名、「二級本科」1名、「三級本科」2名で構成された。また、父親の職業は自営業者(高収入・低学歴という隔りのある特徴をもつ)とその比較対象とする学校関係者の教職員(学歴が高く、教育意識が高いと思われる層)に限定し、7名の聞き取りからの分析となる。分析はKJ法を用いた。本研究は、あらかじめ決めた条件に合わせて対象者の成人子とその父親を選出した。そのため、対象者父親の職業や社会地位の偏りとこのサンプリングからの考察を普遍化させることについて、「個性探求的な事例研究」か「手段的な事例研究」を厳密に区別することが難しいが(N・K・デンジン&Y・S・リンカン 2007 103頁)、着目は父親の教育投資ということから、「手段的な事例研究」として位置づけられる。よってインタビュー調査は妥当であると考えられる。

表 1 対象者一覧表

対象者	子ども				父親							配偶者					家族								
	大学ランク	子どもの大学入学数	子どもの数	子どもの性別	子どもの年齢	子どもの職業/専攻	本人年齢	本人戸籍	本人学歴	本人の職業	本人の仕事	本人の政治立場	本人通勤時間	本人勤務時間	本人の年収(元)	配偶者の年齢	配偶者の戸籍	配偶者の学歴	配偶者の職業	配偶者の仕事	配偶者の政治立場	配偶者の年収(元)	世帯年収(元)	居住地域	
父親N	3年制大学(専科)	有	1	0人	女	20	外国語	50	都市	高校(中)	学校教職員	フルタイム	共産党員	1時間	週5日	3万円(約55.5万円)(中マイナス)	49	都市	高校	主婦	主婦(10年前から親の介護)	無所属	不明	3万円(約55.5万円)	A市
父親J	3年制大学(専科)	有	3	姉2人	男	22	芸術	53	農村	中学校(中)	個人経営者	フルタイム	共産党員	0分	週7日休み無し	10万~15万円(185~277.5万円)(中)	53	農村	高校	主婦	主婦	無所属	不明	10万~15万円(185~277.5万円)	B県
父親J	4年制大学(三本)併進	有	2	弟1人	男	21	起業中	52	都市	小学校(低)	私営企業主	フルタイム	無所属	不明	週7日休み無し	100万円(1850万円)(高)	46	都市	高校	教員	退職	無所属	不明	100万円(1850万円)	A市
父親E	4年制大学(三本)	有	2	姉1人	男	22	金融学	55	都市	専門学校(高)	個人経営者	フルタイム	無所属	0分	週7日休み無し	5万円(92.5万円)(中)	54	都市	高校	主婦	定年退職	無所属	1万6千(29.6万円)	B県	
父親M	4年制大学(二本)	有	1	0人	女	22	教育学 公務員試験合格	53	都市	3年制大学(高)	学校教職員	フルタイム	無所属	20分	週5日	4万円(74万円)(中マイナス)	49	都市	大学	公務員	フルタイム	無所属	4万(約74万円)	A市	
父親L	4年制大学(一本)	有	1	0人	女	22	数学	50	都市	4年制大学(高)	政府事業 法人 責任者	フルタイム	無所属	15分(運転手付き)	週7日 一日8時間	10万~15万円(185~277.5万円)(高)	50	都市	大学	教員	フルタイム	共産党員	6万(111万円)	A市	
父親O	4年制大学(一本)	有	1	0人	女	22	情報科学	46	都市	3年制大学(高)	学校教職員	フルタイム	共産党員	5分	週5日	3万円(55.5万円)(中マイナス)	48	都市	中学校	主婦	主婦	無所属	不明	3万円(55.5万円)	A市

注: レートは18.5で換算した。

対象者の属性は、表1で示した。2015年山西省都市部住民平均収入は一人あたり24,069元(約45万円)⁷、50歳代において中学校卒が最も多い(中国国家统计局2009)ため、父親の収入について上記平均より高いが、便宜上「10万円(185万円)以上」を「高」、「5万～10万円(92.5～185万円)」を「中」、「5万円(92.5万円)以下」を「中マイナス」と表記した。また、父親の学歴について「高校卒」以上を「高」、「高校・中学校卒」は「中」、他は「低」とした。自営業の父親は、ほかより世帯年収がやや高いが、学歴にはばらつきがみられる。政府事業法人責任者の父親は学歴と収入ともに高い。学校の教職員は安定した収入を得ながらも給料がやや低め、学歴がやや高いことがみられる。

4. 語りの分析

進学先大学のランクという投資リターンと、これまで行われてきた投資内容との関連を検討する。語りの引用はなみ線で表記し、文中の引用はさらにかぎカッコをつけた。

(1) 学校外教育投資と投資リターン：「一級・二級本科」と「三級本科以下」の相違点

a. 子が一級本科進学者 自営業：終始一貫選校 V.S. 教職員：献金しなくてもよい

自営業層は経済的に余裕があるため、学校への献金を惜しまず積極的に学校選択してきた。娘が一級本科(以下は「一本」と表記、「二本」「三本」「専科」も同様)の進学を成し遂げた父親Lさん(高収入・高学歴)は、経済力のみならず、人脈をフル活用し、学校選択に全力を注いだ(以下登場する学校はすべて公立)。小学校において、どの学校に通うかは教育部門で決められ、地域によって定められている。にも関わらず、小学校入学は、公務員の知人を通して戸籍所在地の区域を変え、重点校の小学校に入れさせてもらった。また、中学校と高校入学の際、数点の差で入れず、献金し入学させてもらった。さらに、娘は一本の大学に進学するこ

とができたが、専攻は父親の期待していた数学以外のものだったので、知り合いを通して「全ての学科の基礎となり就職時に有利な数学科」に専攻を変更させてもらい、娘が今後進む道を開こうとした。Lさんの娘は自分のために学校選択してきた父親に感謝しているという。

一方、学校選択のための献金に関する反対意見もあった(一本進学・父親Oさん)。

O：各家庭の具体的な状況による。父親がお金持ちなら献金して重点中学校・高校に入学する手もあるが、子どもが転校先のクラスで(成績が)下位になるなら、優越感を失い、自信喪失…子どもは自暴自棄になるかもしれない。

高学歴だが収入が低い傾向にある教職員Oさんは、経済的な余裕がないゆえ献金までしなくてもよいと考えた。献金をしない理由として子どもの精神的な発達を最優先に位置づけた。高学歴と都市部在住(都市部の教育資源が豊富)という共通項を持つLさんとOさんは、子どもの普段の様子を観察し、学校選択という意味決定も子どもと意見交換したうえで決める。子どもとの意見交換は、子どもの意思尊重として捉えられる。子どもをよりランクの高い大学への進学を成し遂げた教育投資のリターンができた父親は、第一に、学校選択するかしないかに関係なく一つの教育投資方針に拘り、それを終始一貫守り通してきたことと、第二に、前提条件として我が子のニーズを聞き出したうえで理解し、子どもの要望に最大限に応えたという、二つの特徴をもっている。

b. 三本進学 自営業：選校したもの、途中諦め

農村部在住のEさん(高学歴・中収入)も学校選択を行った。隣市(小都市)の重点中学校X校の進学率の高さと教育の質を求め、妻の付き添い勉強(中国語で「陪読」)で子どもを行かせた。すなわち、子どもの進学に伴って子どもの生活の世話と勉強のモニタリングを目的に、妻と子どもと一緒に学校近くの地域に転居させた。

Eさんは個人経営者であるため、妻の留守の

間、自営業を営みながら自炊する生活が三年間続いた。その生活には体力的な限界を感じたため地元に戻ってほしいと妻に相談し、高校進学の際、子どもが重点中学 X 校の入学を望んでいたが、農村部近所の高校 Z に変更するよう説得した。しかし、Z 高校の教育水準は比較的に低いため、結果、息子は三本の大学に入学した。E さんは家族の内部調整と決断に対して、「中高一貫の重点中学校 X 校に通い続ければよかったかも」と今も悔しい気持ちが残っているようである。

c. 一本進学 教職員：補習に行かずテキスト購入 V.S. 三本進学 自営業：補習の効果薄

選校以外、授業外の補習における教育投資もみられている。その補習は担任先生から情報が回され、保護者や学生は補習クラスに行くかどうかを決める。E さんは息子(三本)の苦手科目の克服に補習クラスへ行かせたことがあるが、効果はあまりなかった。

E: 高校の時に歴史、化学の成績が理想ではなかった。妻は心配で補習クラスに行かせたがり、俺が同意した。しかし、子ども自身は勉強しないので、効果はイマイチ。

娘を持つ O さんは補習クラスに行かなくても、各科目で指定されたテキストを購入する。

O: 補習クラスに申し込んだら要点を教えてください。子どもは補習クラスに行かないと、みんなについていけなくなる。だからお金を払ってテキストを買う。補習に行かずに子どもの将来が悪くなくても良いのか?

当時の体制は、教師が収入を増やすために行った補習クラスであったが、成績が優秀な娘に対して父親が取った戦略は、補習クラスに行かなくても指定の参考図書を購入し自習させることで娘(一本に進学)の将来を確保しようとした。

先行研究では、教職員の母親は学習塾より自宅指導を行っており、習い事にも熱心である傾向が指摘された(前掲 馬 2017)。本稿においても、学習塾に行かずに参考図書を購入する事例(O さん)から、教職員の父親の教育熱心さ

が明らかにされた。

d. 一本/二本進学 高学歴の自営業者と教職員：趣味と子の受験勉強の指導

読書が趣味と語る父親(事例 L さん・M さん)がいた。教育熱心な父親 L さん(高学歴・高収入、娘一本進学)は文学・歴史という分野において子どもの勉強を指導した。それは L さん自身の趣味や大学卒であることと密接に関係すると考えられる。

L: 俺の趣味は読書。特に歴史を愛好する。小中の受験勉強に分からないことがあったらすぐ俺に聞く。唐詩、宋詞、歴史等について、俺は比較的に完璧に答えられる。中高の時に作文があるが、会社同僚のお子さんも聞きにくる。

M: 小学校の娘は宿題をしたときに、いつもそばで本を読んでいた。いまでも1日読書には2~3時間をとっている。子どもは俺のことを尊敬し、ぜったい逆らわない。

M さん(高学歴・中マイナス収入、娘二本進学)は読書が良い趣味であることと、子どもの人生観・世界観の形成に父親の導き関わっていることが認識されている。このように父親の教育歴と趣味は子どもの付き添い勉強、学業成績の向上に役立つと考えられる。

e. 習い事に対する熱心さは、長期的効果と結びつく

一本進学 将来の職業につながる V.S. 三本以下進学 長期的に効果がない

子どもの特技の養成にも力を入れている父親たちがいた。一人ひとりの個性に合った習い事によって、子どもの才能を発掘すると L さん(高学歴・高収入)は語った。

L: 小さい頃は様々な習い事をさせた。バイオリン、アコーディオン、書道、ダンス、美術など。演技好き、ものまね上手、おしゃべりは得意で、将来は先生になれる。

父親 L さんは、幼い頃から子どもの趣味や好みで特技を養い、さらに、子どもの特技から、将来の道を考えることができた。一方で、あまり効果なかったと認める父親 N さん(低学歴・低収入)・E さん(高学歴・中収入)がいた。

N: 本人の趣味にはなるが、かじった程度。

E: ピアノを習ったことある。短期間でみればメリットがあり、勉強、性格、記憶力に役に立つ。長期にわたってみたらあまり効果が無くて…

Eさん(高学歴・中収入)の息子は、高校に入ってから受験に集中したため、受験内容と直接関係しない習い事はしなくなったと述べた。Eさんがここでいう長期的な効果とは、将来の就職のことを指しており、就職に直接結びつかなかったという考えである。

習い事の熱心さは父親の職業と直接に関連があると言いがたい。しかし、高学歴・高収入の政府事業法人責任者(Lさん)は、娘の習い事の成果がフィードバックされることによって、「子どもの教育については俺に任せる」という自信があった。一方で、子どもが三本大学進学の個人経営者(Eさん)と子どもが専科に進学した教職員(Nさん)には習い事の効果がフィードバックされなかった。父親が習い事に高い関心を寄せる要因として、子どもの特技の養成およびそれが学業成績・その後の進路に与える効果が正比例し、さらにその中長期的効果がフィードバックされ、父親自身は効果を確認できたからこそ熱心になれるではと推察する。

(2) 父親の学歴×職業像と、子どもの職業期待(男女別)

a. 低学歴×自営業の父親は、男子への期待：現実路線

自営業の父親(Jさん・Iさん)は男子の社会的実践の重要性を強調した。Jさん(低学歴・高収入)は私営企業主であり、息子の目から映った父親像は「朝早くに家を出て、夜は酒のにおいをさせて帰ってくる。携帯は鳴りっぱなし」の商人であった。Jさんの息子はせっかく三本の大学に進学したが、「太学で学びたいものがなく、卒業後どこかの会社に入り他人の手下として働くよりも、いまからすぐ社会に出て実践したい」という理由で大学を中退し、起業した。Jさんは起業中の息子に金銭面において全面援

助している。しかし、息子の大学中退およびその後の起業に対して、「自分が経験した起業の大変さから、息子を同じ目にあわせたくない」という親心で反対したが、息子が話を聞いてくれなかった。葛藤したすえ、子どもの考えに干渉しないことにしたと述べた。父子の意見相違には、父親が譲歩することで調整できた。私営企業主父親Jさんの職業は息子の職業観の確立に影響を及ぼし、さらに、高収入だからこそ資金の援助ができたと推察される。

Iさんは、農民出身で生計を立てるため町に出て肉体労働者として働いた後、軍隊に入った。復員後に石炭の運送関連会社を起業した。経験豊富なIさんは息子が専門学校で音楽を選んだことに反対した。男子には現実的な道を歩み、将来は経済的に自立してほしい意思を明示した。

I: 音楽を習い始めたのは、高校の時。僕は賛同しなかった。この専攻を聞いた瞬間、腹が立った。男の子なら、社会で実践を積んで社会を知る。女の子なら、家にいてほしい。女の子は先生になるのが良い。

一方、父親Iさんは、「男性は外で働き、女性は家にいて家事・育児をする」伝統的な役割分業意識により、娘には家にいてもよい、また、もし働くのであれば教師になる方がよいと考え、男女を明確に区別していた。

b. 高学歴×教職員・法人責任者の女子への期待：教師

教職員(Mさん)・法人責任者(Lさん)は、娘に対して、教師になることを期待する。

M: 1. 先進国で最も尊敬される職業のひとつである。2. 学生と一緒にいると自分自身が若くいられる。3. 仕事は8時間に固定されており、ワークライフバランスがとれるから。

次に、Lさん(高学歴・高収入)は法人責任者でありながらも技術分野に勤めている。娘(一本)に博士課程に進学し、学術面において自分を高めてほしいと考えている。

L: できれば卒業後、大学に残ってほしい。大学では自分の時間が比較的が多い。

高学歴の2人(Mさん・Lさん)は今後娘に進んでほしい方向は一致した。リターンとしては、教職員Mさんの娘が大学で教育学を専攻にしその後公務員試験に合格した。他方で、技術分野Lさんの娘は学術の道に進むことが決まった。

(3) 教育観念:「知識は運命を変えた」V.S.「能力至上主義」から「父親資源主義」へ

50歳前後の父親たちの共通項と思われるのは、学齢期に経験した文化大革命であった。この世代のほとんどは、苦勞して学歴を手に入れた経験があると指摘された(辺2009)。本研究の対象者も同じ傾向がみられた。苦勞した体験から「知識は運命を変えた」(M・Eさん)という教育観念につながった。さらに、父親の紆余曲折の実体験は、子どもへの教育観念にも少なからず影響を及ぼしていると語った。

M: 高校の時あまり勉強できなかつたので悔しい気持ちがあつた。その後兵隊に入ったが、復員後勉強しようと思ひ、大学の社会人コースに入った。これは娘の教育に影響している。

一方で、自分の世代では「拼能力」(能力があれば社会で立ち位置が見つかる)が通用したが、息子世代になると、社会的価値観が「能力至上主義」から「父親資源主義」へと大きく変化した(Eさん)と指摘した。

E: いまは「拼爹」「拼钱」「拼势力」。(筆者訳注:社会的成功の判断基準は、昔が「能力」だったが、いまは「潤沢な資産をもつ父親いるかどうか」、「自分自身は潤沢な資産を持っているかどうか」、「人に畏敬の念を抱かせる力を持っているかどうか」に変わった。)

Mさん・Eさんの共通点は、もともと農民出身であったが、大学受験を通じて自らの努力で技術や学歴を手に入れ、「知識によって運命を変えられた」という実体験にある。Mさんは娘に経済的に自立ができる人になってほしいと期待している。Eさんは、中流階層にいる父親自身がそれほど潤沢な資産をもっていないものの、社会的成功の判断基準も変わってきてい

ることから、息子の親依存への心配と経済的自立を願う気持ちが強いと推察される。

5. 結論と考察

中国の学校外教育投資について三つのリサーチクエスチョンに基づき分析してきた。

まず、中国において、父親の子どもに対する学校外教育投資がどのようなものか。本稿では教育投資とは、子どもが幼い頃に、勉強(知識を身につける)や習い事(潜在的能力を掘り起こす)を通して、子どもの発達段階において自己意識に自信を持たせることを目指し、様々な方法を試みることである。

次に、父親の教育投資リターンについては、子どもが進学した大学のランクを基準にした。父親の子どもへの教育投資の内容と進学先の大学のランクとの関連について、限られた事例から、選校・付き添い勉強・塾・習い事に関して有効と肯定する父親(Mさん・Lさん・Oさん)の方が、子どもの進学先の大学のランクが高いことがわかった。教育投資に熱心なLさん(娘は一本大学に進学)は経済力と学歴両方の持ち主で、豊富な収入と人脈を持つ父親であるからこそできたことと思われがちであるが、Lさんは子どもの状況を常に最優先させた。父親の趣味や子どもとのコミュニケーションを通して、常に子どもの状況を把握しているからこそ(Lさん・Oさん)、子どもの進路を導き出すことによって、教育リターンが高くなることが示唆された。また、教育投資リターンについて、父親は我が子との間に葛藤が生じた場合(Jさん)、双方が納得するまで調整したり、または片方が妥協点を見出したりすることで、教育投資から起業時の資金援助への投資に変更し、投資が成立するものと捉えられる。

また、父親の職業階層からの影響について、自営業の父親がモデルで起業の道を選んだ息子の事例(Jさん)と、教職員の父親の娘は大学で教育学を専攻とした事例(Mさん)から、父親の趣味習慣、職業による生活リズム、職業

観などが、日常において子どもに伝わり、子どもの職業観の確立およびその後の職業選択に影響すると推察される。そのほか、父親は、子どもの性別（男女）によって就いてもらいたい職業が異なる（Iさん）。男性と女性の職業の棲み分けという伝統的なイデオロギーが存在する可能性が推測できる。

さらに、文化大革命という時代背景のもと、自身が教育を受ける機会に恵まれたため、「知識は運命を変える」と信じる父親がいる一方、現実の壁にぶつかり、子ども世代と自分たちの世代の社会状況が変わっていると認識し、能力や学歴よりも、潤沢な資産・権力を持つ父親がそばにいた方が現実的と語る父親もいた。本研究で取り上げている中流階層の父親の特徴としては、自分が潤沢な資産をもっていないものの、「父親バトル」という社会現象から子どもの経済的自立を願う気持ちが強く、自立の方向へ導こうとすることが推察できる。

図1は父親の教育投資はリターンとお互いに作用することを表した。父親は我が子の意志を尊重し、ニーズに合わせて行った勉強（選校・付き添い勉強・塾）への投資は、大学進学としてフィードバックされる。一本進学できてリターンが高いと感じた父親（Lさん）は、「子どもの教育は俺に任せろ」という自信が身につくとともに、子どもが安定の職業をつくことを期待し、階層の維持や上昇をさせようとする。

一方で、投資効果が薄いと感じた父親は、親に依存している子ども、または現実路線に沿っていない子どもを心配し、自立へ導こうとしている。言い換えれば、階層維持や低下を防ごうとしている。さらに、習い事による特技の養成のねらいは、ただ単に楽しめる趣味ではなく、長期的効果（すなわち将来の職業）にむすびつく、ということが明らかにされた。他方で、大学辞退した事例（Jさん）からは、教育リターンを放り出したが、潤沢な資産を持つ父親がいるからこそ、子どもの起業が援助されるようになった。ここで教育投資リターンは、一つの形ではない、ということが示された。すなわち、大学進学という投資リターンは不成立になった事例（Jさん）であるが、その後意外な展開になり、投資リターンは再構築されることになった。潤沢な資産をもつ父親の投資は、大学辞退という最悪の事態から子どもを保護するセーフティネットとして機能したといえよう。これは、高い収入をもつ父親だからこそできた「父親バトル」であろう。子どもの起業を通して階層を維持、さらに上昇を目指しているのではなかろうか。

次は2点ほど考察していきたい。第一に、選校については、規定外のものになっているものの、教育投資が白熱するなか一時的なブームと見なしてよいか。本現象について現地で学校側からの情報採取などの調査研究が非常に難し

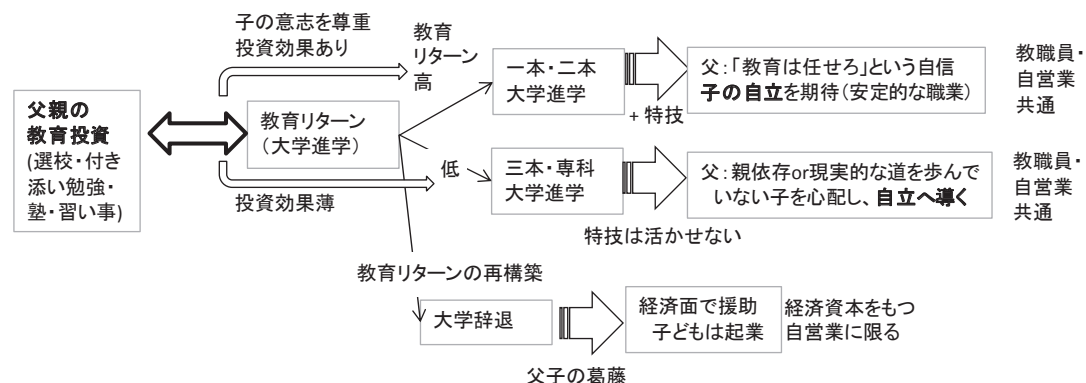


図1 父親の教育投資とリターンの相互作用

い。本研究は、聞き取り調査の手法によるもので、語りが当事者偏重という面も留意しなければならないが、保護者の経験談という形で大変貴重なデータを入し分析できた。篠原(2007)によると各地域、さらに各学校によって金額にはばらつきがあったと述べた。本研究では、限られた対象者へのヒアリング調査のため、地域と学校の徴収金額について明確に提示できなかったが、ただ一人の対象者の、小中高校ならびに大学進学まですべて選校を行ったという事例を提示できたことに意義があったと考えられる。選校費の幅は経済発展と直結しており、金額の変動があることと、負担できる人は経済的余裕がある家族に限られることが推察できる。第二に、補習クラスの結果から、中国における教育不公平の実情と破綻が露出し、市場経済にともない教育の産業化が進んだ結果、負の影響が浮き彫りとなった。補習クラスに関しては、学校管理者側が取り締まりを図っているものの、根絶は難しいと思われる。教師収入の低さと結びつけて考えると、体制管理と平行して給与の底上げの施策が望まれる。

最後に、本研究の限界点についてふれる。まず、山西省の地方都市および農村部から収集したデータであり、対象者は中間階層に偏る点に留意しなければならない。次に、対象者および配偶者の学歴は、同地域・同年齢層の平均より大幅に上回り、高いことである。さらに、父親の階層より、母親の教育姿勢、例えば付き添い勉強の事例を取り上げたが、通塾・習い事との関連性についてもさらに明らかにする必要があった。今後の課題は、中国全国範囲で大規模の縦断的実証研究を行うことである。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費若手B「父親の社会階層と青年期から成人期へ移行する父子関係」(研究課題番号26870197)の助成によって行われた。

注

- 1 「九〇後」とは、1990年代生まれの人を指す。ここでは比較的若い、20代のことを全体的に意味する。
- 2 「応試教育」(受験教育)は、従来、優秀な成績を目指す知識偏重の教育を指している。
- 3 「素質教育」(素質教育)とは、児童・生徒の創造精神と実践能力の涵養を重視する養育である。中国式の「ゆとり教育」ともいえる(徐2012)。
- 4 2017年1月ZUU online 記事「中国はかつての日本のようにゆとり教育へ」<https://zuuonline.com/archives/134584> (2017年4月3日取得)
- 5 2010年10月16日河北大学飲酒運転ひき逃げ事件では、運転過失罪を問われる張本人に、粗暴なふるまいや傲慢な発言「俺の親父は李剛(当時警察署の副所長)」があった。その後、インターネットで「俺の親父は李剛」が流行語として広く知れ渡ることとなり、「官二代」や「拼爹」をめぐる議論が繰り広げられた。「官二代」の権力の顕示欲に猛烈な批判があった一方、権力・潤沢な資産を持つ父親への羨ましさを表すものもあった。世論の主流は、「官二代」と「富二代」における不合理な手段での社会資源の略奪は許されたいという内容であった。2010年11月5日 日経ビジネス 世界鑑測 北村豊の「中国・キタムラリポート」<http://business.nikkeibp.co.jp/article/world/20101101/216905/> (2017年8月3日取得)
- 6 3年制大学は中国語で「専科」と呼ばれ、技術や資格を養成する大学が多い。4年制大学は中国語で「本科」と呼ばれ、レベル高い順から「一級」「二級」「三級」と分類されている。ここでは「一級本科」を「一本」、「二級本科」を「二本」、「三級本科」を「三本」と略す。
- 7 『光明日報』2015年2月26日15版「2015：収入増長如何更公平」

文献

- Blake,J.,1989, "Family Size and achievement", University of California Press.
- 辺静, 2009, 「中国の歴史変動と『共和国同代人』のライフコース：文化大革命期の子どもたち」お茶の水女子大学博士論文(甲第575号)。
- 平尾桂子, 2006, 「教育達成ときょうだい構成一性別間格差を中心に一」『第2回家族についての全国調査(NFRJ03) 報告書 No.2: 親子, きょうだい, サポー

- トネットワーク』上智大学。
- 郭從斌・閔維方, 2007, 「中国城镇居民教育与收入代际流动的關係研究」『教育研究』5: 3-14.
- 徐濛, 2012, 「日本のゆとり教育と中国の素質教育・課程改革の比較的考察」『教育学研究紀要』3: 237-249.
- 項純, 2010, 「中国における素質教育をめざす基礎教育改革をめぐる論争」『京都大学大学院教育研究科紀要』56: 359-371.
- 馬芳芳, 2017, 「中国中小都市における学校外教育から見た親の教育戦略に関する階層差」『家族社会学』29(1): 19-33.
- 森田美佐, 2010, 「日本の父親の子育てと『稼ぎ手』役割」『高知大学教育学部研究報告』71: 179-186.
- N・K・デンジン, Y・S・リンカン, 2007, 『質的研究ハンドブック 2巻 質的研究の設計と戦略』, 北大路書房.
- 樋田大二郎・邵勤風・十河直幸, 2007, 「第3章2. 北京編 北京調査から教えられたこと」『学習基本調査 国際6都市調査報告書』ベネッセ教育総合研究所 (http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/gakukihon_6toshi/hon/hon_3_2_2.html 2017年3月27日取得).
- 小野ルチヤ, 2015, 「親の教育投資におけるきょうだい間差別: 子どもの数・出生順・性別に着目して」, 『同志社政策科学研究』16(2), 37-51.
- 劉堅・付宜紅, 2007, 「第2章2. 北京の調査結果の特徴に関する分析」『学習基本調査 国際6都市調査報告書』ベネッセ教育総合研究所 (<http://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail.php?id=3213>. 2017年3月27日取得)
- 篠原清昭, 2007, 「教育の市場かみる中国の私教育費の構造変動」『岐阜大学教育学部研究報告人文科学』55(1): 167-180.
- 孫雲暁, 2009, 『父教力度決定孩子高度』新世紀出版社.
- 橋本俊詔・八木匡, 2009, 『教育と格差』日本評論社.
- 杜禹威, 2012, 「今日の中国教育社会における文化大革命の影響－教育意識に関する世代別インタビュー調査をもとに－」『社会学論考』33: 29-41.

Educational Investment in School Selection and Extracurricular Education by Fathers Who Have “Post-90s” Children in Contemporary China
—Focusing on Fathers’ Social Classes and a Return Investment—

Liu Nan

Summary

This study aims to clarify the definitions involved in educational investment by Chinese fathers for their children and the factors influencing it. Interviews were conducted targeting seven fathers of “post-90s” children who have graduated from a public high school in Shanxi Province, China. As a result, a general concept of educational investment could be formed based on the following four points: school selection, cram schools, supervised study, and extracurricular lessons. Next, considering the elements that influence educational investment, the following conclusions are suggested. 1) Rather than a father’s resources (such as his income or educational history) having a direct influence on a child’s life, a father guides his child’s life through the father’s own hobbies and communication with his child. 2) There is a way of thinking (due to a father’s own experiences) that “knowledge changes your fortune.” However, the social conditions for this generation of children are changing; further, senses of values with regards to fathers are diversifying due to factors including an awareness that it is better to have a rich and powerful father rather than one who is capable or has a good educational record. 3) Regarding the influences of fathers’ positions within professional hierarchies, it can be hypothesized that his hobbies, habits, life rhythm, and opinions about their occupation, among other aspects, pass down to their children (even though occupational expectations are different for boys and girls) and that these establish a child’s view of occupations and influence their choice of occupation later.